少数民族の文化的アイデンティティー：中国雲南省の蒙古族の調査から

松沢哲郎[1)]、成瀬哲生[2)]、池上哲司[3)]、辻本雅史[4)]
1）京都大学霊長類研究所、2）山梨大学教育学部、
3）大谷大学文学部、4）甲南女子大学

中国南部・雲南省の蒙古族の調査を短期間おこなった。その速報である。北の草原にすむ蒙古族が元の時代に南下して雲南省に到った。その子孫約５千人が蒙古族の村を作って暮らしている。約700年間、祖地モンゴルから2500kmを隔てて、雲南の蒙古族はどのようにして民族としての文化的な伝統を守っているのか。遊牧民から農耕民へ、そして雲南のたくさんの少数民族のひとつとして、しなやかに姿を変えながら現代中国に生き延びている、チンギスカンの子孫たちの姿があった。雲南の蒙古族をとおして、少数民族の文化的アイデンティティーについて考察する。

1　調査の目的

京都大学ヒマラヤ医学学術調査計画と名づけたプロジェクトのもとに、1989年度から継続して、ヒマラヤ高地住民の学術調査を登山活動と平行してすすめてきた（松沢・松林、1991）。学術調査の主体は医学調査である（松林ほか、1994ab）。ユーラシア大陸の南縁を東西に伸びたヒマラヤ地域では、たくさんの少数民族が、独自の文化をもった暮らしを営んでいる。こうした人々のくらしを、「ライフコース」という視点から総合的に検討するという構想である。

1993年の夏、筆者らは、パキスタンからクンジェラブ峠を越えて、中国最西端の新疆ウイグル自治区に抜けた。主要な研究対象は、パキスタンの北部辺境のフンザ地域の住民である。1973年、ちょうど20年前の訪問（松沢・高木、1973）のときと比較することによって、辺境の地フンザの社会変容を把握したいと考えた（松沢、1993）。この間に、水力発電ダムやカラコルム・ハイウエイの完成によって、電灯がともり物資が流入し、人々の暮らしはモダンになっていた。一方で、そうした物質文明の急速な流入に抗して、自分たちの暮らしと自然を守ろうとする積極的な姿勢も印象的だった。

1994年の夏は、同じチームで、雲南の少数民族の調査を企画した。前年がヒマラヤの西のはずれだったので、本年は東のはずれへ。とりあえずヒマラヤをめぐる自然の大局を見ておきたいと考えたのである。雲南省は、少数民族の宝庫である。中尾佐助らの提唱した「照葉樹林文化」（佐々木、1984；1986）にあるように、南方に起源する日本文化のひとつの源流をなす地域である。

2　調査の対象

1）雲貴高原

東西に長く伸びるヒマラヤ山脈の北側に、チベット高原の水を集めて東に流れるブラマプトラ川がある。この川は、インド東北部のアッサム地方で、ヒマラヤ山脈を深くうがって南下し、さらに向きを西に変えて、河口近くでガンジス川と出会ってベンガル湾に注ぐ。この大屈曲部に聳えるナムチェバルワとギャラペリの２峰を最後に、その東には、もう7000mを越える山がなくなる。

ただしヒマラヤ山脈は、まだ東に隆起をのばす。アッサム、チベット、ミャンマー（ビルマ）と雲南省の出会うあたりに、雲南省の最高峰でもある梅里雪山（メイリシュエシャン、6740m）が聳えている。さらに東南には、白馬雪山や玉龍雪山という5000m台の秀麗な峰が連なる。それを最後に、雪を戴く大ヒマラヤの山々の姿は消える。

あとはなだらかな起伏が続く。標高約2000mの雲貴高原である。雲南省から東隣の貴州省にかけてひろがるこの高原地帯は、揚子江とメコン川という２つの大河を分けている。

雲貴高原は北緯２４度付近に位置し、台湾とほぼ同緯度である。しかし、100m上昇するごとに約0.6度気温は低下するので、約12度低いという計算になる。雲南省の省都・昆明は雲貴高原の中心地であり、別名を「春城」という。年間を通じて日中の気温が20度前後で花が絶えず、春のような気候が続くからそう名づけられた。

2）雲南の少数民族

雲南省は、南をミャンマー、ラオス、ベトナムと接している。ヒマラヤ山脈の東端が雲貴高原へとつらなる地形が自然の要衝となって、中国内陸部から南下する力と、インドシナ半島の亜熱帯地域から北上する力が出会って、雲南独自の文化圏をもってきた。それは、少数民族のいりまじった文化である。90パーセント以上をしめる大多数の漢族を除いて、中国には55の「少数民族」がいる。そして、そのうちの約半数が雲南省にいる。雲南の歴史・地理・民族などについての概説書は少なくない（佐々木、1984；1986；鎌沢、1993）。中国政府による雲南の少数民族政策の展開については、松村（1993）を参照されたい。

最も信頼できる資料として、中国側で発行している「雲南辞典」（1993）によれば、雲南省の人口は1990年現在で、約3700万人である。少数民族として多い順に、イ族405万人、白族134万人、ハニ族125万人、タイ族101万人、壮族100万人、苗族90万人、リス族56万人、回族52万人、となっている。雲南省の蒙古族は、１万3160人である。そのうちの約５千人が、昆明の南約140キロにある通海県の興蒙（シンモン）に５つの村としてかたまって居住している（図１、図２）。

3）チンギスカンの子孫の村：通海県興蒙

「大理石」に名を残す大理国が雲南を支配していた13世紀に、はるか北方のモンゴルの草原で、チンギスカンが蒙古の諸部族を統一した。蒙古族は、南下して中国（南宋）を攻略した。そのため、南宋は1279年に滅亡して、蒙古族の元朝が建った。

蒙古族は、憲宗モンケ（在位1251-1259年）の代に、雲南に侵攻し、1253年に大理国を滅ぼした。チンギスカンの孫のフビライが、このとき中国方面への侵略の大総督をしていた。1256年には雲南と四川とを開通させ、南宋攻略の作戦を本格化している。雲南への侵攻は、1234年に金を滅ぼしたあとの南宋攻略の一貫であり、北方からの侵攻軍と連動して挟撃することが計画されていた。

ところがモンケの死によって、南宋攻略は一時的に中断されてフビライ（在位1260-1294年）が即位した。国号を元としたのは、このフビライの代で1271年のことである。

雲南に侵攻した蒙古軍は、憲宗６年（1256年）に、現在の興蒙（蒙古族の村）が隣接する都市である河西（West City）の地を支配するに到った。

図１　雲南の蒙古族の村の遠景

図2　雲南の蒙古族の村の様子

フビライの将軍アラティマ・チャンタンが約10万の大軍で侵攻したのである。蒙古軍の駐屯地は、曲陀関（チートーカン）と呼ばれる場所に置かれた。そこに元帥府が立てられたのは、元の至元20年（1283年）のことである。この曲陀関は、後述する蒙古族の村・興蒙から西北に約14ｋｍ離れている。こうした蒙古軍の雲南侵攻の歴史的経緯については、巻末の漢語資料を参照されたい。

侵攻した蒙古軍のうち、14世紀半ば過ぎに元朝が滅んだあともそのまま残った者が、現在の雲南の蒙古族となった。こうして約700年の時間と、蒙古の祖地から直線距離でも約2500キロを隔てて、雲南の蒙古人がどのようにして現在もなお蒙古人であり続けられるのか。一言で言えば、それが今回の調査にあたってたてた主要な問いである。

3　調査の方法

調査チームは、松沢・辻本・成瀬・池上の４人と、通訳の韓寧、運転手兼マネージャーの馬吉利の計６人（付録２参照）である。

調査方法としては、①蒙古族の村の現地滞在による実地見聞、②インフォーマントからの聞き取り調査、③蒙古族の村ないし昆明でしか手に入らないような文献その他の資料の収集、をおこなった。中国では日本語通訳よりも英語通訳の方が全般に優れている。生活の細部にわたる質問をするには、英語通訳の方が信頼できる。今回は、長春師範学校の英語専攻を卒業し、９月から昆明工学院の英語教師になる優秀な若い女性の通訳を雇うことができた。優秀な英語通訳を得て、さらには成瀬が中国語を話せるので、かなり詳細な聞き取り調査ができた。

蒙古族の村に滞在した正味８日間のあいだ、村の中央にある共産党の地区委員会の招待所に寝泊まりした。第１日目、はまず近隣のようすを車で見てまわった。その後、毎日、村の中を歩き回った。背後の山にも登った。たったひとつの学校を訪れて、校長にインタビューした。村にあるすべての寺を見た。招かれて民家で食事をし、家の中の暮らしぶりをかいまみることができた。

以下では、こうして集めた情報をもとに雲南の蒙古族の村のくらしの素描をしたい。

4　調査の結果

1）興蒙の現状と歴史

蒙古族の居住地、興蒙（しんもん）は、鳳山という小さな丘の南麓に東西にのびた５つの村から

なる。西から中村、白閣村、下村、交椅湾村、桃家嘴村である。5村あわせて人口は5173人。その98パーセント以上が蒙古族である。異民族（非蒙古族）は90人で、そのうち漢族74人、イ族10人、ハニ族4人、回族1人、ラークー族1人。異民族は多くの場合、嫁してきた女性である。

古老の話によると、興蒙は昔は、上村、中村、下村の3つの村から構成されていた。その後、上村は漢族の村になって、蒙古族の手を離れた。人口の増加とともに、まず中村と下村のあいだに白閣村ができ、下村のさらに東に交椅湾村ができ、4カ村と少し離れたところに桃家嘴村ができた。今は数キロも離れたところにある杞麓（キロク）湖が、現在の3倍ほどの広さがあって、村は湖に面していた。明代までは漁業が主で、その後は半農半漁の生活だったらしい。

戦後、共産党政権が樹立され、1958年の「大躍進」の時代に湖の干拓事業が進められて、農地が増え、湖は縮小した。今は、湖水は遠く離れてしまい、村内では農業を生業としている。

2）興蒙の生業

村のまわりは、稲とたばこの畑である。とうもろこし、さといも、蔬菜類の畑も少々あった。雲南全体で、主要な換金作物がたばこと茶である。たばこの栽培は、水を必要とするので低地に比較的多く、茶の栽培は高地に多い。8月の中旬、ちょうど村はたばこの収穫に忙しかった（図3）。大きな葉を天日で乾かす。さらに、乾燥工場で、石炭を炊いた部屋で乾燥させる。

たばこを主とした農業は、耕作面積がそれほどでないため、女性労働力だけでじゅうぶんやっていける。そこで男たちは建築業を生業とし、しごとを村の外に求めた。建築チームを組んで、雲南の各地で、学校・病院その他の建築を請け負っている。

1964-65年ころ、村に電気が来た。1970年代に裏の鳳山に浄化槽を作り、ポンプでいったん水を汲み上げて、各戸に給水するようになった。つまり上水道が整備された。それまでは井戸である。燃料は石炭と薪。ただし薪は少ない。松葉を集めて縄のようにねじりあげたものを燃料にしていた。

3）学校教育

興蒙の中村にある学校を訪問した。7月上旬から8月いっぱいまで夏休みである。以下の情報は、学校長の王汝信先生からの聞き書き、および学校に残っている記録に基づいたものである。

まず、清代に私立の学校ができた。それが民国時代の1941年に公立学校となった。ただし当時は漢族も蒙古族も同じ学校だった。1944年に6年制

図3　たばこの葉の収穫

の小学校となり、1949年の中華人民共和国の建国後、蒙古族だけの学校となり、中学校もその学校に加わった。1985年に現在の校舎が中村にできた。それまでは、白閣村の寺院である関公廟の一角に学校施設が設けられていた。

校長の王汝信先生は55歳。34年間、教師をしている。校長の月給は600元、日本円で約７千円である。ちなみに先生の月給は380元から６００元の範囲にある。

ここでは幼稚園も付設されており、４クラス、184人だった。５・６歳の２年保育で就園率は百パーセントである。小学校が６年生まで700人。うち男子55パーセント、女子が45パーセントを占めている。

中学校は３年生まで、167人が学んでいる。小学校への就学率は百パーセントで、中学校へも昨年から全員進学するようになったという。逆にいえば、昨年までは中学校へ進学しない子どもも少なくなかった、ということである。ちなみに中国で中学校が義務教育になったのは最近のことだという。

教師は全部で45人だそうだ。この教師の８割が蒙古族である。家庭では雲南蒙古語を話し、学校では幼稚園を除いてすべて中国語。週に一度だけ、蒙古語（祖地モンゴルの蒙古語）の授業がある。半数近くの教師が蒙古語ができる。「学校では普通語（北京の標準語）で話そう」というスローガンが校舎の正面に大きく書かれていた。ということは、普通語でなかなか話さないという現状なのだろう。

高校（高級中学）への進学者はぐっと少なくなって、おおむね20パーセント前後。進学する高校は近くの町である通海（トンハイ）と、やや離れた峨山（ウーシャン）とに各１校ある。前者は普通の高校だが、後者は少数民族のための民族学院で、少数民族保護政策の一環として1980年に設立された。

少数民族の受験生には、入学試験の成績に一律10点が加算され、入学後も政府からの奨学金給付や無料寄宿舎の提供などの優遇措置がある。そのため、より優秀な学生は峨山の民族学院に進学する。ちなみに進学者は昨年の６人（８人受験）、今年の２人（10人受験）で、全員が民族学院に進学したという。

大学への進学となるとさらに少なく、現在、村全体で12人であるという。大学は昆明だけでなく、重慶、西安、武漢、遠くは吉林などと全国に及んでいる。大学卒業後は、地元に帰ってきて幹部としての仕事に就く場合が多いらしい。

４）家庭と子ども

滞在中に食事に招待されて、民家を３軒訪問した。家の作りは、漢族の村も回族の村も蒙古族の村も、特別変わりはない。訪問した家はたがいによく似ている。入ってすぐのところに中庭があって、それをコの字型に囲むように左右対称の２階建てになっている。中庭に面した広い土間がリビングで、そこで食事をとる。両隣は寝室。左右に突き出たウイングに台所がある。

客が来たときには家長である男性が台所で料理を作る。たくさんの皿に食べきれないほどの料理を出す。３世代同居の大家族である。いずれもなぜか女性が元気であったのが印象的である。男は建築業で出稼ぎに出ることと関係があるのだろうか。なお興蒙の蒙古族は、周辺の村と異なり通常一日２食。農繁期に限って３食だという。

リビングにはテレビが置いてあった。映りは悪いが４チャンネル受信できる。省都の昆明では、10チャンネルも受信できて、うち２局は24時間放送である。テレビの普及率はほぼ百パーセント。ビデオも半数近くの家庭にあるという。ただしいずれも昆明での話である。

興蒙ではビデオはまだ少ないのか、村の公会堂で、毎晩ビデオの上映会がおこなわれていた。中をのぞいてみると、子どもを含めて30人あまりほどの観客だった。

子どもたちは大事にされている。ただし、１人っ子政策で歪んだ北京の過保護な子どもと違って、親の手伝いをし、弟妹のめんどうをよくみる。家族としての原風景を保っている（図４）。

子どもたちの遊びも素朴だ。夏休みの学校の校庭で男の子たちが何やら騒いでいる。のぞいてみると、カブトムシくらいの大きな虫を土に生き埋めにしている。土を背負ってはい出てくる姿がおもしろいようだ。つかまえてはまた生き埋めにしていた。別の日には、校庭の一方の隅にある養魚

図4　子守をする子どもたち

用の池で、男の子と女の子がグループに別れて水遊びをしていた。みんな素っ裸になって水に飛び込む。アヒルと一緒に泳ぐ。

村を歩いていると、リスに似た小動物を捕まえてペットにしている子がいた。工事用の煉瓦と砂山のあるところでは、砂遊び。道ばたの水たまりでは、粘土で何やら造形を楽しむ子も見かけた。

もう少し大きくなった青年期の若者は、男女をとわず夜遊びをする。村のはずれに、ビリヤードの台が並んで夜遅くまで電気がこうこうとともっている。ミラーボールもどきで室内を飾ったダンスパーティー用のホールもあった。

5）内蒙古との交流

興蒙の蒙古族と、祖地蒙古との結びつきの歴史は比較的新しい。1957年、当時の駐中国蒙古大使が、興蒙に蒙古族がいることを北京で偶然知ったのがきっかけだという。逆に言うと、それ以前には強固な文化的アイデンティティーは無かったようだ。

1965年に、4人の中学生が内蒙古に勉学に派遣された。1978年には、内蒙古から調査団が来て、蒙古族の同胞であることを確認した。1980年代に入って、内蒙古に青少年を派遣するプログラム（中学卒業生が2、3年間）が軌道に乗った。これらはすべて主に内蒙古の蒙古族からの援助によっている。少数民族としての連帯、とくに祖地を遠く離れた同胞に対して手をさしのべるということらしい。

内蒙古で学ぶことは、まず蒙古語である。現在では20－30パーセントの語彙が共通なだけで、ことばが通じない。固有の文字である蒙古文字の学習、蒙古の伝統文化とくに踊りや音楽の習得、雲南蒙古族が必要とする医者や技術者の養成。それらが内蒙古への青年派遣の目的だったそうだ。

1981年の派遣団が、チンギスカン、その子のオゴタイ、そしてチンギスカンの孫フビライの3像の写真を持ち帰った。1982年にその写真をもとに3神像を作って、村の中央にある関公廟に祭った（図5）。見るからに新しい像である。内蒙古とのつながりができるようになってから、「ナダム」と呼ばれる3年に一度の蒙古の祭を興蒙でも祝うようになった。

1980年代になって、北京政府の少数民族を優遇する政策が示されてから、蒙古族としての文化を自らもすすんでリバイバルしようとしているらしい。

6）回族の村（納古営村、下回村）との比較

納古営村という回族の村を訪れた。元末明初に開村したという。約6000人の人口を擁する。学校は、村の中心のモスク内のほかに、納古学校（1980年設立）という学校があり、計２校ある。いずれも近代的校舎をそなえていた。

納古学校で出会った馬さんという女性の中年の教師から話を聞いた。学校制度は興蒙学校と同じく幼稚園から中学校まで備えている。コーランを解するためのアラビア文字の授業があるほかは、他と基本的な違いはない。小学生が約1000人、中学生約400人。30－40人程度の優秀児は中学から通海に出るという。

この村は全般的に大変豊かだった。村の伝統技術（武器製造）を生かしたスチール関係の工業がさかんで、近年の近代化政策の波に乗り、経済的に大変うるおっている。あちこちで豪邸の建築工事が見られた。それでも村から大学への進学は年に１－２人程度でまだ少ない。

5　考察

1）生態学的環境と文化

概して言えば、雲南の蒙古族の生活習慣はほぼ完全に漢化しているといってよい。内モンゴルや外モンゴルの文化人類学的調査と比較して、家も、食事も、葬式も、皆違っている（一ノ瀬、1991；小長谷、1991；内田、1972）。蒙古の草原では、死者は土にそのまま埋める。あるいはテントごと火葬することもあるという。それに対して、雲南の蒙古族は、漢族と同様に、棺に入れて土葬する。

服装もかなり違っている（松本、1985）。ただし雲南少数民族のなかで比較すると、女性の服装は、蒙古族としてのアイデンティティーを外部に知らせるサインになっている。詰め襟のカラフルな上着。①未婚、②既婚で子ども無し、③既婚で子どもあり、の３通りの帽子がドレスコードになっている（図６）。

もっとも、この女性の服装も、内・外モンゴルの服装とはまったく異なっている点は重要だろう。全般的にいえば、蒙古族の女性の服装は、モンゴルの祖地の風俗より、雲南の他の少数民族の服装と共通した点の方が多いといえる。雲南では多種類の少数民族が共存しているので、服装の微細な部分での違いによって、少数民族間の差異化が形成されているといえる。

雲南の少数民族を見わたしてみると、一般に女性のドレスコードだけが目立って、男性の方はかなりルーズである。少数民族がひしめきあってい

図５　チンギスカンの像

る雲南では、服装によって女性の出自をはっきり区別することが必要なのかもしれない。男性が適切な結婚相手を選びとる。女性を他族の男から守って抱え込む。そのためには、何族の女性であるかをはっきりさせる必要がある。

生物の進化の過程では、種間の交雑を防ぐためにそれぞれの種を他種からきわだたせるような特徴が進化した。また、性選択がかかって、よりオスらしいオス、よりメスらしいメスの特徴が進化した例もある。こうした遺伝的な変異のアナロジーとして、ヒトの文化的アイデンティティーを示すサインも、文化的な「進化」をとげると考えられる。そうした文化的進化を考えるうえで、雲南の少数民族で発達したドレスコードは興味深い事例だろう。

民族としてのアイデンティティーのサインのもうひとつはことばである。雲南の蒙古族の語彙と祖地の蒙古語とは、すでに述べたように、だいたい20－30パーセントの語彙が一致する程度だという。おもしろいのは、男女、父母、左右、１・２・３・４・５といった数など、基本的な用語はすべて漢化していて両者で異なる。かろうじて、「耳」とか、「下着」とか、「だいじょうぶ」といった語彙だけが共通に残っている。まあそれくらいは漢語と違っていても殺されはしない、というものだけがかろうじて固有性を保ったと考えられる。いずれにしても、言語と環境のインタラクションを考えるうえで、内蒙古・外蒙古・興蒙の３者の蒙古語の比較研究は今後の興味深い研究テーマだろう。

今回の調査を通じて、「民族の文化」とか「民族としてのアイデンティティー」といったものが、少し見えてきたような気がする。その結論は、自分にとってはきわめて意外な、驚くべきことだった。それは、民族の文化も、民族としてのアイデンティティーも、その民族の内部だけで決定されているのではなく、その民族をとりまく環境、つまり外部との関係にも大きく依存しているということだ。

時代とともに変わることなく、代々受け継がれていく不変のもの。もしそういうものがあるとしたら、それを支えているのは、民族の側に内在する努力はもちろんとしても、それ以上に周囲の環境がそれを可能にしているように思われる。

そもそも雲南の蒙古族を調査しようと考えたとき、700年と2500ｋｍの時空を越えて受け継がれる「蒙古」という「民族としてのアイデンティティー」の存在に心惹かれた。そして、それを可能

図６　雲南の蒙古族の女性のドレスコート

にする家庭のありかたや学校教育を探ろうとした。しかし実際には、元朝の崩壊以後、数百年にわたって、ある意味では必死に漢化して生き延びてきたのが雲南の蒙古族だった。生きるためなら、名前を漢族風に改め、宗教を変え、風習を変え、ことばも合わせる。かれらが積極的に自らの民族を示す文化を残そうとした形跡は乏しい。周囲の環境の変化に応じて、民族としての文化的なアイデンティティーは、薄れもするし色濃くもなるようだ。

マイノリティーの存立する条件を考えてみよう。時代を越えてかろうじて蒙古族として固有に残ったものが、女性のドレスコードとことばだった。それも著しく祖地の服装や言語とは変容している。ただ独自というだけにすぎない。これは、雲南のほかの少数民族に認められる服装と言語の固有性の範囲にある。蒙古族に特殊なわけではない。要するに、少数民族の割拠する雲南という特殊な生態学的・文化的環境が、服装と語彙について蒙古族の固有性を残すだけの寛容さをもっていた。一方、多数者としての漢族の習俗と言語は、同じ地域に暮らす人々がある程度共有すべき文化的な装置だったと考えられる。

2）アーミッシュとの比較

雲南の蒙古族を見ていて、アメリカ・ペンシルバニアのアーミッシュを思い出した。現代アメリカで、馬車に乗り電気を使わず、300年前の祖先と同じ暮らしをしているアナバプティスト（再洗礼派）の人々である（松沢、1987ab）。

かれらの祖先であるドイツとフランスの国境付近に住んでいたヨーロッパのアーミッシュは、カソリックからもプロテスタントからも迫害を受けて消滅した。新大陸にわたったアーミッシュだけが生き延びた。それは、アメリカという国が、そもそも移民の国で、出自を異にするたくさんの少数民族が寄り集まってできているからだ。違った者どうしが、とりあえず対等に互いの存在を認めて、住み分けることによって共存した。

そういえばアーミッシュも、ドレスコードとことばに固有性を残している。ドレスコードとしては、男は吊りズボンであごひげをたくわえる。女は、中央分けのひっつめ髪で、裾の長いドレスを着る。男女とも服は黒か原色で、模様のある布地は用いない。ことばは、ペンシルバニア・ダッチと呼ばれるドイツ語の方言である。ただし300年前に別れた祖地のドイツ語とは、日常の会話でかろうじて意味が通じ合う程度に変容している。こうした文化的変容の基本的な構図は、雲南の蒙古族と変わらない。

アーミッシュとしてのアイデンティティーを失った者は、ふつうの「アメリカ人」として生きていく。しかし実体としては、少数民族の集合体であるアメリカに「アメリカ人」というものはもともと厳密には存在しない。それとと同様に、中国にも「中国人」というものは存在しない。

中国文学・中国語学を専門とする成瀬の説によれば、漢族ですら、漢族という実体があるわけではないという。少数民族としてのアイデンティティーを失った者がすべて漢族を自称するのだ。実際、蒙古族、白族、イ族といった区分も、人口調査の際に自己申告するものでしかない。今日の「1人っ子政策」により漢族では1子に制限される。すると2子以上を設けられる少数民族を自称する者が最近になって増えているという。

3）マイノリティー

少数民族が民族としてのアイデンティティーを保ち、かつ多数のものと共存する。そのためには、多様な少数民族の存在を是とする環境こそを必要とする。少数民族の側の内在的な努力だけではない。それをとりまく多数者の側の問題が大きい。少数民族を「マイノリティー（少数者集団）」と置き換えてみると、これは現代社会の構図に通じる問題なのかもしれない。障害者、ゲイ、在日外国人・・・、現代の日本にもさまざまなかたちのマイノリティーが存在する。そうしたマイノリティーを内包する社会はいかにあるべきなのか。雲南の蒙古族をみて、あるべき社会の姿に想いをめぐらした。

引用文献

一ノ瀬恵（1991）「モンゴルに暮らす」、岩波書店。
鎌沢久也（1993）「雲南：西南中国の人びと」、平河出版社。
小長谷有紀（1991）「モンゴルの春」、河出書房新社。

松林公蔵・奥宮清人・戸部隆吉・堀了平（1994a）加齢とエコロジー：フンザカラコルム医学調査から。学術月報、47(9):16-23。

松林公蔵・瀬戸嗣郎・戸部隆吉・堀了平（1994b）ヒマラヤ低酸素と人体の順応。学術月報、47(2):16-21。

松本敏子（1985）「足でたずねた世界の民族服」、関西衣生活研究会。

松村嘉久（1993）中国における少数民族政策の展開：雲南省を事例として。人文地理、45:51-74。

松沢哲郎（1987a）アーミッシュの学校。発達、30:97-108。

松沢哲郎（1987b）　アーミッシュのくらし。発達、31:82-92。

松沢哲郎（1993）　辺境の旅ーフンザ・カラコルムから新疆・ウイグルへ。発達、56:101-110。

松沢哲郎・高木真一（1973）　解禁後のフンザに入る：パス氷河踏査。岩と雪、34:86-92。

松沢哲郎・松林公蔵（1992）　京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画（KUMREH）。ヒマラヤ学誌、2:3-42。

三宅修（1972）「モンゴル紀行：草原と氷河の秘境」、山と渓谷社。

佐々木高明編（1984）　雲南の照葉樹のもとで。日本放送出版協会。

佐々木高明（1986）　照葉樹林文化の道：ブータン・雲南から日本へ。日本放送協会。

雲南辞典編集委員会（1993）「雲南辞典」、雲南人民出版社。

付録１　雲南蒙古族漢語文献目録

「雲南蒙古族的歴史考略」江応梁、雲南日報　1957年4月12日

『雲南蒙古族簡史』・杜玉亭・陳呂范、雲南人民出版社　1979年・1984年

「蒙古族歴史研究的一項成果ー《雲南蒙古族簡史》評介」、李恵銓、研究集刊　1981年2月

「杞麓湖畔（居住在雲南的蒙古族）」、熊永忠　内蒙古婦女　1981年3月

「雲南蒙古族的由来」蘇松林　雲南日報　1981年5月29日

『鳳凰集』通海県新蒙大隊編　雲南民族出版社　1982年

「雲南蒙古族社会主義現代化問題的歴史探索」杜玉亭　雲南歴史研究所研究集刊　1983年2月

「雲南通海県河西公社新蒙大隊蒙古族的調査報告」楊荊楚等　民族研究動態　1983年3月

「雲南的蒙古族」徐長嵘　北京晩報　1984年4月12日

「雲南蒙古族簡述」〔美〕亨利・施瓦茨著　索介然摘訳　民族訳叢　1987年3月

『雲南蒙古族民間文学集成』劉輝豪・孫敏主編　雲南民族出版社　1988年

「雲南蒙古族的習俗和口頭文化」劉啓輝　民族文学研究集刊第2集・雲南社科院民　族文学所編　1988年

「尋訪雲南蒙古族（上・下）」銭江　人民日報（海外版）1989年4月6日

「生活在雲南高原的草原民族后裔」孫敏　雲南民俗集刊第4集

『玉渓地区民族志（第六章　蒙古族）』玉渓地区民族事務委員会編　雲南民族出版社　1992年10月

「曲陀関與馬刨井ー走馬南高原」李琳　春城晩報　1993年5月19日

付録２：調査チームと関係者・関係機関

松沢哲郎、京都大学霊長類研究所教授（霊長類学）

成瀬哲生、山梨大学教授（中国語・中国文学）

池上哲司、大谷大学教授（倫理学）

辻本雅史、甲南女子大学教授（教育史学）

韓寧（ハン・ニン）昆明工学院外語系教員

馬吉利（マ・チリ）雲南省登山協会接待役

付録３：行動記録

８月１３日、大阪ー成田ー北京ー昆明。

８月１４日、昆明から南へ約１４０キロのジープの旅。玉渓市を通り、通海県にある蒙古族の村、興蒙へ。宿泊所で歓迎の宴。

８月１５日、興蒙の小中学校訪問、校長と面談。午後、キロク湖と通海市。夜、２人の蒙古族医師来訪。

８月１６日、関公廟（三聖宮）、中村の民家に食事の招待。午後、鳳山の貯水槽まで登る。交椅湾村の民家で食事。

８月１７日、学校再訪、校長と面談。魯班寺。老人会の踊り。

８月１８日、桃家嘴村訪問。北海寺と洪佛寺。鳳山登山。天子廟。

８月１９日、曲陀関、千戸営・帥府、河西の市場、下村の民家で食事。クエイの母に面談。

８月２０日、病院（興蒙蒙古族郷衛生院）訪問、回族の村（納古村、下回村）訪問。宿泊所で送別の宴。

８月２１日、昆明に戻る。書店で文献捜し。

８月２２日、昆明ー北京ー成田。

付記　今回の調査は文部省科学研究費海外学術調査（代表：堀了平、課題番号：０５０４１１１２、高所住民の発達と老化にかんする生理学的研究：環境適応とライフコース）の援助を受けた。調査にあたって、下記の機関ならびに方々のお世話になった。北京の中国科学探険委員会、ならびに昆明の雲南省登山協会。興蒙の村人のみなさん、とくに、王汝信、楊云友、謝学誠、超魯、施富紅、楊正吉、王紅蓮、クエイ（敬称略）。